

グプタ時代仏教史研究の一考察 (3)

仲 沢 浩 祐

中インドのブデルカンド地区、ウンチャラの南西にある Khoh 村の洞窟とその周辺地域から発見された銅板銘文は、* Fleet の蒐録したところによれば、その数は11にのぼっている。そこで、これらの資料をもとに、順次、施与者、施与物（内容）、施与の対象と目的について検討を加えて行きたい。

まず、これらの碑銘から施与者として二つの王家、すなわち、Parivrāja ka 王家 A と Ucchakalpa を首都とする王家 B とが知られ、それぞれの系譜が認められる。両王家は共に Maharāja を称しているが、この両王家の関係がいかなるものであったかを求めると、幸いにして Bhumara 石柱碑文から次のようなことが知られる。(イ)この石柱は両王家の境界に建立されたこと。(ロ)建立の時期は(王家 A の) Hastin と(王家 B の) śarvanātha の統治の時代であること、などである。そこで、ここに資料とした碑銘から得られる日付によって、両者の上限と下限を求めると、Hastin については、それぞれ A. D. 475 年と A. D. 510 年が、śarvanātha については、A. D. 512 年と A. D. 534 年が得られる。さらに、後者の文 Jayanātha については A. D. 493~497 年の年代が得られる。したがって、互いに領国を接していた両王の統治の接点は、遅くも A. D. 500 年頃には初まっていたと推定され、ブダグプタやバーヌグプタとも同時代の人であったことが明らかである。また、王家 A の碑文に「グプタ王の宗主権を享受して (Gupta-nrpa-rājya-bhuktau)」と、グプタ王の宗主権下にあったことを明記しているのに対し、王家 B の碑文には全くグプタに言及されていない。この両王家の碑文の差異は、先に見た年代をも考慮してみるならば、王家 B は Jayanātha 或は彼の父 Vyāghra の頃には、グプタの宗主権から離れていたのではないかと想われる。すなわち、ブダグプタの統治の晩年であろう A. D. 493 年以前に、叛旗を翻していたと考えられる。

つぎに、施与の内容を検討すると、いずれも一村或はその半分の土地を与えている。その上、施与された村から王のもとに集められる生産の分け前 (undra) やその土地を耕作する人に課せられた税金 (uparikara) などとも共に施与されており、いわば、不輸不入の特権も与えられていた。殊

に、王家Bのものにはその土地に関連する通行税、王権、金なども譲渡されることを具体的に記している。

第三に、施与の対象は、(一)バラモンに対するものと、(二)寺院に対するものとに分けることができる。(一)は王家Aのものに、(二)は王家Bのものに対応される。前者には、克明に施与されるバラモン修行者たちの名と出身、及び所属する学派が記されており、後者には、王から譲渡者へ、譲渡者から寺院へという寄進の経路が示されている。一般に、施与される土地は休耕の土地であるが、王家Bの碑銘には、施与する対象となった村の耕作者や職人たちに王が発令した形が示されており、現在耕作し、使用している土地をも施与していることが知られる。また、施与を受けるものがいずれもバラモン或はバラモンの寺院であることは、この両王家がバラモン、特にヴィシヌ信仰に篤い尊崇の念をもっていたことを知るのである。

第四に、施与の目的はいずれもバラモン修行僧への食物の維持や慈善施設の設定、寺院の修復のためであることが明記されている。

上来の検討を整理すると、グプタ時代の中インド Budelkhand 地区について、次のようなことがいえよう。この地区には Devādhyā に始まる Parivrājaka 王家と Oghadeva に始まる王家とがあり、両王家は初めグプタの宗主権下にあったが、A. D. 500年頃に、後者は叛旗を翻して、封臣としての立場を維持していた前者と抗争していたらしい。こうした頃、Khoh 村の南西にある Eraṇ でも、グプタ領の辺境を侵す勢力が強大になりつつあった。したがって、Parivrājaka 王家は西に強大な勢力の侵略の報に脅かされつつ、南では Uccakalpa の王家と戦うという立場にあったと考えられ、やがてグプタの版図は東へと縮小されていったと思われる。一方、Uccakalpa の王家謀反の動因やその明確な時期は、この王家の南に位置していたヴァーカータカ (Vākāṭaka) 王朝との関係のもとに考察されねばならないであろう。

また、この地方では両王家の保護のもとにヴィシヌ信仰が盛んでありこれらのバラモン僧や寺院が、施与された土地とそこに附随する一切の収益やものを所有するという経済背景のもとに教線を張り、自らの修行の安定を得ていたことが認められる。したがって、仏教はあまり栄えていなかったといえよう。

* 紙数の関係上、注は資料とした J. F. Fleet の *Inscriptions of the Early Gupta Kings and their Successors, Corpus Inscriptionum Indicarum* III, 1888を示すのみにとどめた。